會報

1955年9月 | 181 | 日本山岳會

第三次マナスル登山計畫について

別宮貞俊

第三次マナスル登山計畫實行については既に一九五四年登山隊のサマにおける不幸な事件以來、本會としては勿論、この計畫の當初からの熱心な支援者である毎日新聞社でも再擧を計りたい希望は持つていたのであるが、何分にも尨大な資金を要することでもあり、前回の如く容易に決定出來なかつた。

まず昨年六月九日の理事會並に同年十月二十六日の役員總會にはかり本會として再擧の決議を經、第十二回ヒマラヤ委員會でも同年十一月四日の最終委員會においては同委員會委員並に名譽會員近藤茂吉氏よりは特に一同代表の意見として

1 萬難を排してマナスルを再擧するよう理事會に御願いする。

2 なるべく早い機會に數名よりなる小エキスペディションの形式をもつてサマに出掛けて貰いたい。

3 隊長を先に選ぶこと。

という御發言があつた。一方第二次登山隊以來御支援を仰いでいた文部省に對しては、同年八月頃より槙前會長の盡力により衆議院文部委員の方々の絶大な御支援を通じて再度の資金的援助を御願いし漸く同年十二月には當時の文部大臣を初め關係各位の承諾も得たので（金額は未定）ここに本會としてもいよいよ本格的に次回の計畫に對して準備を進めた次第である。

サマの事件については同年十月隊員並にヒマラヤ委員會員、役員等を中心に本邦チベットの權威、多田等觀師を御招きして檢討會を催し、一方、ネパール政府との交渉も着々進行してはいたが、サマ現地が何分遠隔地なので事情聽取に時日を要し、その通知を受領したのは本年一月末であり、時期的には本年プレモンスーンの登山に間に會いかねるというのが實狀であつた。

しかし前述の如く本會としても再擧の件だけは確定していたので、第三次の登山隊の構成などについては一九五四年隊隊員の歸京後の檢討會の結果「次回の遠征隊はまず隊長を先決し、總てを隊長の責任の下に計畫實行を拂られたいとの申出もあり、また近藤名譽會員をはじめ役員並に會員間にも同樣の意見が壓倒的であつたので昨年十一月十日の理事會で右可否を諮つた結果、隊長先決の件（選出の方法は別）は滿場異議なく可決、次いで十月二十四日の臨時役員總會で右隊長選出の方法につき諮つたところ、右方法は理事會に一任の上、會長、兩副會長で隊長を決定する旨決議され、次いで十一月二十七日臨時理事會を開催した（詳細は會報一七七号「會務報告」參照）

右に基く會長、兩副會長の隊長選出の報吉は次の如き松方副會長の一九五五年一月十二日の役員總會における報告により隊長は槙前會長に決定したのである。

◇松方副會長の報告

次回マナスル隊長の選考については十一月の理事會で、會長、副會長に一任すると決定されていたが右三名の間で選考に入る前に一應內部における各地各方面の見解も徵しておくことを考え、會長から若干の會員に對し書面をもつて意見を求めた。過去においてヒマラヤ遠征に直接または間接に關係あつた會員、支部の責任者等がこの意見を求められた會員の主なるものであつたが五十一の回答があつた。槙、日高、松方の三名は十二月廿三日會合し意見を交換すると同時に、右回答を檢討したが、三名の意見も五十一の回答の多數のものとその方向を一にするものであつた。

左にその結論を要約する。

1 次のマナスル登頂の計畫は國の財政的支持に大いに期待し、その上にすべてが立案されつつある。したがつて日本山岳會としてもそれにこたえる建まえをとる必要があり、隊長もその點を考慮して人選する必要がある

2 次の隊はサマ問題など、たんなる登山以外に種々複雜な問題を處理しなければならない。したがつて隊長はこれらの問題を責任をもつて處理し得るものでなければならない。

3 以上の二點からして今回は隊長として槙氏を推す。

4 隊の編成（隊員の選考などをふくむ）とその時期などについては昭和三十年度の政府の豫算の中に如何に遠征費が處理されるかに關連しており、またカトマンズ、サマなど現地の情勢の展開にも大いに關係がある從つてこれらの決定は一切選ばれた隊長の判斷によつて決定することを期待する。すべての事情を總合して今日考えられることは次の計畫は今明年二ケ年にわたる繼續的計畫として考えるほかないのではないか、サマ問題にしても相當の國費を仰いで隊を派遣する以上、事前に十二分の瀬ぶみを現地でした上でなければ本隊をくり込むことは無責任と考えるが、これらの問題はすべて隊長がその判斷によつて處理することを期待する。

5 隊長に事故あるときの代行者は隊長が責任をもつて選任するなお當日槙前會長よりは「資金の未確定の（金額の意）今日次期計畫を進捗するための必要、緊急事務は引續き行うが身邊雜事の處理並に健康診斷を經るため少しく時日を要するので外部への發表は（新聞發表の意）暫時猶豫されたいと申出があつた。

三十年度豫算が本年六月國會を通過しここに始めて文部省より多額の資金的援助を仰げることが決定した以上本會としても計畫遂行上ますますその實現について一段と愼重を期する責任を痛感、槙隊長の次期計畫の第一歩としてサマの事情を詳細調査並に一九五六年の登山許可受領の目的をもつて本年四月末、西堀評議員並に成瀨常務理事をネパール政府に派した次第である。（右報告は會報第一八〇号參照）

第三次マナスル登山
隊長を御引受けして

槇　有恒

第三次マナスル登山計畫の進展は、會としては去る六月までは西堀、成瀬兩氏のネパール渡航の外、文書によるネパール政府との交渉に止まり、具體的な準備になり掛るには到っておりません。これは資金調達の未確定な部分が多いためでありましたがこの間毎日新聞社後援會の方は昨秋以來斷えず活動を續けていたわけであります。幸い六月末、國庫補助のこともほぼ確定し、ここに活動を開始した次第であります。西堀、成瀬兩氏の盡力によりネパール政府との了解も完全に進み、豫備的準備は一切ととのいました。七月初旬、ネパール政府から一九五五年のポストモンスーンを試みて、思わしからぬ場合に翌春も許可するとの通知に接しました。資金面よりどうしても有利である來春に主力を傾注したい考えから、ここにその本隊のための準備をいたす目的をもつて先遣隊三名を派遣することにしました。かねてから私は會より隊長の指命にあずかっておりましたが、少からず躊躇いたしておりました。しかし四圍の事情の赴くところ、八月當初に至りお受けいたすことになりました。

この上は駑馬に鞭打っておつとめ致そうと考えております。何分の御支援を御願い申し上げます。第三次マナスル登山隊はかくして二隊を出すことになりましたが、昭和二十七年の調査隊以來の經驗、知識に立つて前進することは申すまでもありません。まず先遣隊によつて地圖の作製、サマ住民との了解を現地でさらに深めること、その他昨年の高處用裝備のテスト、雪崩の調査本隊荷物の陸送の段取りなどをすることに、なつております。

先遣隊の諸準備も終了し、すでに出荷いたし、一段落いたしたところであります。なお隊長を補佐していただく目的にてヒマラヤ委員會をお願いした次第であります。（八月二十五日）

ヒマラヤ委員會設置

第三次マナスル登山の計畫について、その計畫、準備、實行、其他一切は隊長の責任において行われることになつたのは別項記載の通りであるが今回、新隊長より隊長に對する援助並に補佐の機關としてヒマラヤ委員會設置並にその委員の發表があつたので發表する

別宮會長、松方副會長、日高副會長、入澤、成瀬、小原、辰沼
沼倉各常務理事
古市（毎日新聞社ヒマラヤ後援會事務局長）
大島（毎日新聞社運動部次長）
三田（第一次隊長）
堀田（第二次隊長）谷口（第二次副隊長）
高木（第一次登攀隊長）
早川（募金世話人）
西堀榮三郎、伊藤秀五郎
各支部長
篠田軍治（關西支部長）藤島源太郎（越後支部長）伊藤彌十郎（福島支部長）中田勇吉（富山支部長）池田知幸（石川支部長）高山忠四朗（信濃支部長）三井松男（山梨支部長）織田收（山陰支部長）後藤幹次（山形支部長）大室貞一郎（靜岡支部長）

第三次マナスル登山
先遣隊員決定

立教大學卒
本會常務理事
隊員　橋本誠二
北大卒、地質學專攻
村山雅美
東大卒、前二回隊員
本會理事

カラコラム便り

今西　錦司

新聞にわれわれの行動がどの程度までのつているか知りませんが一應今までの經過をお知らせしましょう。六月四日に Gilgit 出發 Hunza, Nagir を經て、Nagir の coolie で Hispar に向つた。二十五日 Hispar Pass をスキーで通過 Snow Lake への下りは快適な滑降を樂しむ。Biafo は Hispar, Biafo, Baltoro の三つのうちで一番面白かつた。誰れも道を知つたものがなかつたので、氷河の上をクレバスを飛びこえながら歩いたり、氷河をはずして山ぎわの草原や湖の間をさまよったりした。Askole で Stak La, Ganto La を越えきてたインダス隊と合流、七月四日から Baltoro に向つた。七月十二日 Concordia 着、快晴無風、K_2 を見て昨年のイタリア隊の偉業をしのぶ。しかしここまで來るとかえつて山が低く見える。むしろ Urdokas あたりから Crystal の上にぬーつと巨體をもたげた Broad Peak を見た時、八〇〇〇米の素晴しさに感心したのである。Baltoro のあとで Snow Lake-Kurdopin-Shimshal という Shipton の果さなかつたコースをやるつもりだつたのに Shimshal 越えは國境に近ずきすぎるからまかりならぬというお達しを受けたためすつかり計畫が狂つてしまつた。そこで今西と中尾は Hispar Pass を越えて Nagar に歸る連中と七月二十五日 Askole で別かれ、Skoro La を越えて Shigar の谷に出てきた。Shigar からは例の皮袋の筏にて川を下り、二十九日當地着、さすがにカラコラム入りの基地だけあつて、いろいろな information を入手した。今年のバルトロは幸い日本隊だけであつたが Huche の谷へは Masherbrum をねらつたニュージーランド隊がはいり、引つづきアメリカ隊 Harvard Mountaineering Club がきて、いまはいつている。K_2 が目標だと、Araudu の谷にはいつたドイツ隊（Frankfurt）が Workmans の Pyramid Peak に成功したことはラジオで聞いた。彼等は近々引きあげてくるそうである。

Broad Peak のドイツ隊は今年は休んで來年再擧する。そしてちやんと當地に Diputy Leader をおいている。Harvard はヒューストンが Harvard と緣があるからカラコラムへやつて來たのだろう。ニュージーランドだつて Brown 中佐という人が國連から派遣されて Pindi に根城をかまえているので、うまく行つたのであろう。ニュージーランド隊に參加した Brown 中佐と Aslum 大尉（當地の Baltistan Mountaineering Club の猛者）とには會つてその經驗談を聞いた。カラコラム・エクスペジションは昔から金がかかると相場がきまつているが、まず五〇、〇〇〇RSの手持ちがひと山打つために必要である。われわれはついにクランポンもウインドヤッケも一度も使わずじまいに終つてしまつたけれどもこんどのわれわれの經驗を踏み臺にして他日マナスル登頂のちに日本からも登山隊のカラコラムへ送り出されることを希望する。當地は洋々と流れるインダスを前にひかえて風光すこぶる雄大、われわれはいま Gilgit 行きの飛行機待ちをしているのだが、ここなら何日いてもあきないであろう。毎日アプリコットを飽食しています。

八月一日 Skardu にて

遠い飛驒乘越

朝比奈　菊雄

八月の末、茗溪堂主人に山行を誘われた。乘鞍から、蒲田に下つて、近ごろ評判のよい宝温泉を探り、槍平から飛驒乘越を通つて上高地へ、というプランである。先達は渡邊公平氏。折も折、乘鞍の福島清毅から肩の小屋増築工事落成式の案内狀が來たので頓に遊心が崩した。夏山なんて混むし、夏だから特に休暇があるという譯ではなし、いつそ今年は七、八月をおとなしくして、秋になつたら動くことにしようなどと考えていたのだが、何しろ近頃體の具合がおかしくなつた。クシャミばかり出て、藥をやたらに呑んでもなおらない。久しく山に御無沙汰した罰だろうと判斷して、勇躍參加することにした。

土曜の夜新宿駅の混雜はいつもの通りである。こんどは御主人の奥さん現われないなと云うと、それは僕がいるからさと、ハム平さんに一本やられた。一月二人のときは、奥さんわざ〳〵來られ、小生もどうやらスキーめいたものを擔いで、薄汚い服裝でいるのを確めて安堵したらしい顔付をされたものである。どうも惡友でお氣の毒ですと御主人にいうと、いえ、もつと惡いのもおりますですからと慰められた。

安房峠を越え、バスは、平湯目指して馳け下りた。まだ中學生の頃、平湯という素朴な山間の湯が見るかげもなくシユウ惡に俗化した、という悲憤慷慨の文章を讀んだことがある。それはもちろん、バスが乘鞍山上に行列をなすよりはるか前のことであるから、近頃の平湯はどんな事になつているかしらんという興味はあつたが、格別のことも無かつた。何しろ以前のことを知らないのだから比較のしようが無い。パチンコやスマートボールがあつても哀惜の情も湧いて來ないのである。江戸前すしの看板もあり、飾り窓にはロウ細工の極彩色のすしが一皿置いてあつた。

平湯峠を過ぎて、いよいよ乘鞍の山脊にかゝる頃から天候が惡化して來た。やがて霧となり、雨となつた。終點についたが、雨はますます烈しい。おまけに風がごおーつと、おそろしい音を吹きつけて來る。さすが乘鞍だで吹く風もちがつたもんだ、と同車の愛想の良い爺さんが感じ入つている。氣がついて見ると、どうやらこのバスは肩の小屋落成式の來賓たちを滿載しているのである。我々が心ならずもバスを利用したのも、實は本日正午の落成式に間に合おうとの算段なのであり、ひいては長途に備えて體力を温存しようとの遠謀でもあるのである。

バスの好意で、肩の小屋の入口まで來賓一同を運んで呉れた。

落成被露の會場は新設のホールである。モルタル叩きの土間の中央にメインテーブルを置き、四圍に四人づゝのテーブルを散布したさまを見て、清毅やりおつたなと思つた。先日、友人Tの結婚式祝宴に清毅夫妻も現われたがその會場の配置をホウフツさせるものがあつたのである。この感は下平觀光課長の司會による進行ぶりによつてますます強められた。

約百名近い大人數である。宇宙線研究所長、コロナ觀測所長、營林署長、村長から、警察署長、旗鉾郵便局長、役場の書記あたりを中堅とし、下は小生に至るまで、窓の外の風雨もものかは、杯をあげてこの佳き日を祝賀する。山岳會を代表してとか何とか云われてハム平さんも遂に引ぱり出される破目になる。宴はようやくたけなわに、入り亂れて歡をつくすという狀況となる。

新らしくボーリングしたところから物すごくお湯が湧き出した。一分間十一石出るという白骨の泡の湯の主人の話である。やゝあつて、實は八石だ、と訂正した。それで露天風呂を作つたと、マッチを見せる。成程、神宮プールのような廣々とした中で、人々がおよぎ廻つている繪がついている「みんな、ここへへえつて×××するだ、まず困つたもんだ」と泡の湯は深刻な顔をした。

白鬚をしごいて悠然と盃を重ねていた神主も遂に醉を發したらしい、白裝束で女中部屋の入口を叩いて何事か大聲叱呼している。女中さん達に擊退されると席に戻るが、やがてまた出擊して來ては擊退されている。

翌朝は雲が切れた。今のうちにと頂上に出かける。戻つて來て見ると衣冠束帶に身をかためた神主が御幣を振つている。清毅に聞くと、昨日はたゞ酒を飲んだだけで、本當の式はこれから奉行するのだ相だ。女中部屋では女中さん一同がうやうやしく平伏して御はらいを受けている。

湯川の谷の美しい林に見惚れながら長い下りをひた下りに下つて泡の湯の前に飛出した時はホツとした。成程径のわきに威勢よく湯が噴いている。その湯をみちびいて低いところに、三、四坪の池が作つてある。

「これがその露天風呂というわけか」と我々三人は湯垢ですつかり淺くなつてしまつたその池を崖の上からしげしげ見下ろした。

ハム平さんがよんどころない急用を控えていたため、不本意ながら前途を打切つて一同翌日歸京した。槍の肩まで登るには些か脚が痛みすぎているという事情もあつたのである。體面上、東京に戻つてからはあくまで初志を貫徹したことにしようと申し合せて置いたが、宝温泉は熱いかぬるいかときかれたのにはハム平さんも困つたということであつた。

チョゴリサ氷河の源域へ

今年の春 Stanley Conway を隊長とするニュー・ジーランド隊が、インダス波の支流シャイヨー河のまた支流たるフッシェ溪谷を遡つて、カラコルムの雄峰マシャーブルム（七八二一米）に挑んだことは、既に會報に書いておいたが、これは惡天候によつて失敗に終つた。

ところで人間はいつも必ずしも頂上ばかりを求めているのではないということを證據立てるためにスコットランドからの參加者を含むハーバード大學山岳會の六人のメンバーが六千封度の食糧と裝備をカラチに集結し六月下旬北東パキスタンの探檢的處女地たるチョゴリサ氷河の源域に向つた。

隊員は

(1) Henry S.Francis Jr.(24), 隊長 Cleveland, Ohio
(2) John Nixon (26), Stonington, Conn.
(3) John Humphreys (22) Manhattan
(4) Craig Merrihue (21) 〃
(5) Dr Frederick Dunn(26) 〃
(6) Arthur Reid (33)

科學者としては

(7) D.r. Bernard Kummel
(8) Dr. Grady Webster
(5) は途々、人種學的及び生理學的な研究も行う。
(6) はスコットランドのセメント・アンドリュウス大學教授
(7) 右大學の比較動物學博物館員、サルトロ山群で海性化石の研究
(8) は植物分類學者、植物生育上における寒氣反應の調査。

登山の目標としては五八〇〇米のBCから

K_6(Peak 27) 7282 m (23890 ft)
K_7(〃 27) 6934 〃 (22750 〃)
Chogolisa 1 7654 〃 (25110 〃)
(Bride Peak)

これは一九〇九年にアプルツィが頂上直下一五〇米まで迫り、當時の高度記錄をつくつた山。

右の他天候次第ではマッシャーブルム山群、ミーター山群にも出かけて行く豫定。（I・Y）

戦後最初のアムネ・マチン探検 III

吉澤一郎

クラークはこの機會に、クンブムに住む班禪喇嘛（當時十二才）を訪れ、その上この僧の援助をも瀬むことにした。その交渉が円滑に終ると直ぐ西寧に戻り、今度は馬將軍が催してくれた盛大な送別會に出席した。

人や馬その他の準備は完了した。豫防注射も行つた。チベット風の衣服も支給された。万事好調に運んで行つた時に、突然横槍が入つて來た。回教遠征軍の隊長に西歐人、殊にアメリカ人を頂くとは何事かという不滿の聲が有力筋から出て來たのである。この嫌がらせは然しドルジェの關係者達の骨折りで無事に納まつた。

かくて、一九四九年四月五日、クラークを隊長とする回教軍アムネ・マチン遠征隊は遂に西寧を後にした。そのキャラバンの組立ちは凡そ次の如きものであつた。

ヤク八十頭、高所用の鞍馬七十頭、一群の換え馬、荷馬、駱駝、後には山羊と荷車が加えられた。人間としては鍛冶屋、獸醫、人醫地質學者、地形學者、生物學者、植物學者、馬買人、下級裁判官、人文學教授、氣象官、道路官、獵師、軍僧、政治及び軍事官、寄生動物學者、諜報官、機關銃係……

最初の間、クラークは客人であるのか、遠征隊長であるのか判斷がつかずに戸迷いした。彼の他の主なる主役はドルジェの他に、馬將軍の副官でこの遠征隊の連絡係をやるソロモン馬それに馬シェンルン大佐、タンチェンテ大尉から成つていた。

丹喝爾から氣象觀測を開始する。この邊は距離を表現するのに三つの言葉しかない。コサッァが聲の聞える距離、ツァポが半日行程、シャサが一日行程。なお峠はニハといゝ、ラは峠への登り、テールが峠からの下りを意味するらしい。

日月山脈の峠（三五二〇米）を越え、タオ・タン河につく。こゝが第一泊地となる。こゝで城長の馬チンから歓迎をうけた。

次の泊地（C2）はチャプチャ。途中最近盗賊に遭つたキャラバンの残骸を見る。皆丸裸にされ、中には首のないのが三體あつた。頭は賊の子供達がフットボールの代りに使うのだそうである。山の端に騎馬の盗賊がチラホラと見えたが、クラーク隊の先頭には輕機關銃が据えてあつたので、見送つているだけであつた。冬期が過ぎるとこういう匪賊の出没が頻繁になるらしい。

クラークらは本隊を離れて黄河沿岸のチュク（C3、二五四八米西溝共和）まで往復する。途中硫黄泉のあるところがあつた。優秀な馬を數頭購入してチャプチャに戻る。

今度はC4のサ・チュ・ユ（二八八〇米）可なり大きな狼が出没する。砂地と同じ色で仲々見分けがつかない。この邊のチベット族は時間を表現するのに左のような言葉を使う。トーラン（夜明けの直前）、ツェシャール（山頂が輝く時、日の出）ニイマ（朝、シッキム北部のチョルテン・ニイマとかニイマ・ドルジェなどの名を思い出す）ニイン・ゲン（昼）サ・リプ（夕方）ゴンモ（夜）ナム・チェ（夜中、ナムチェ・バザールを思い出しませんか）

C5はタラ臺地上のチン・コー途中は砂丘のならぶ沙漠地帶。附近に魚のいない湖が三つある。北方のがタリエン海（ユン海）南にあるのがゲンガ泊（卵の湖）近くにあるのがウンドゥール泊。四十人の騎馬匪賊に遭遇し先方は死者五人、こつちは死者二人とそれに馬八頭を失つた。

C5を午前四時、身を刺すような寒風と砂埃を冒して出發する。氷に被われているフク河峽谷の河床に沿つて南西に向う。峽谷を出て丘上に登ると、前方の平原に黒い天幕が無數に張られている。クラーク等は、あとから來る五千の回教騎兵隊の先遣隊だとおどかして無事こゝを通り抜ける。

セメノフ山脈をチュンロン峠（三九〇〇米）によつて越え、やがて大河覇（C6）につく。クムブムから直接やつて來たタ・チェンテ隊が迎えに出て來る。この邊には蒙古人が木の王（モド・エン・カン）と呼ぶ直徑三呎に及ぶ大きなタマリスク（聖柳）が澤山ある。城壁の裏側に棄てられたような飛行場があつたが、これは第二次大戰中には使われなかつたらしい。

食糧を補充するために狩獵を行う。この邊の平原にはギャゼル（羚羊の一種）が大群をなしており、山中には石羊及び青羊の二種からなるヤン（大角羊）、キャン（野生の驢馬）、シェー・チー（麝香鹿）ドレモー（チベット熊）等が澤山いる。

黄河の西、ヒマラヤの北部、特に北東チベットの探檢は、チベット族による殺りくが絶え間ないので、少數部隊によるものは非常に危險だから注意と準備が必要である。

南西にワフン山（五一四二米）西と南に夫々四三九八米及び四〇二〇米の山が見える。

西寧にいる馬將軍への無電連絡で、大河覇在留の無線技師五名の同行が許可された。

大河覇城寒を出發し、タ・ファ河を渡り、晝頃ツァスラ（鎌の山四四九六米）山の西に達し、小流の源頭、峠の手前で一泊とする。

馬將軍よりの無電による命令により、改めて各自の職分が決定された。

レオナード・フランシス・クラーク（大佐、隊長）ツェダン・ドルジェ（王子、祕書、科學）ソロモン馬（馬シェン・ジュイ、連絡政治的接衝）馬シェン・ルン（大佐、護衛）諜報）タ・チェン・テ（大尉、輸送、徴募、野營裝備、鍛冶屋、獸醫—醫者のことはチベット語でナンパという。例のナンパ・ラと綴りは同じ）食糧（人と動物の）食事、法律）パオ・チャン・チン（中尉、ラジオ、通信連絡、同行者中唯一のシナ人）アブゾル（マ・ウェイ・シャン、偵察銃砲係、彼は二十九才で、ゲリラの專門家、アフガニスタン、ペルシャで闘つたことがある、馬大佐によると彼は日本人を含めて凡ゆるアジア人を殺したことがある。そしてアブゾルはアジアの兵隊で最も危險なのは、日本人とチベット族であるといつている）ツ・ジェ（チベット人護衛隊長、ヤク隊の世話）。

今やヤクが二一〇頭、鞍馬一一七頭、その他の運搬動物五六頭、後から追いついたラサへのキャラバンを加えて動物八〇〇頭、鐵砲一二〇挺の大部隊となつた。

アムネ・マチン峠の高さを正確に測るため、C7から沸騰點法による高度測定を始めた。馬將軍との無電連絡は、ソ連の強力な電波によつて屢ゝ攪亂される。それは中央アジアで共産軍に對抗しているのは、今や馬歩芳だけであつたからである。

C7を出發して急な峠道を登り四一二〇米の鞍部に達する。左側に小鎌山の氷塔が聳えている。反對側の下りで小さな雪崩を出した。西方に巨大なウグツ（蒙古名）山脈の中にある大鎌山が見える。

ナシャンマティエン山の末端を登り、ロックティ河を渡つてC8（三八一〇米）とする。この邊から見えるウグツ山脈の高峰には、西に四七四九米峰、南西に四八四六米峰、南東に四三一三米峰、それから北東に大河覇で見た五一四二米のワフン山等がある。

次にダンスール峠（四三八〇米）を越える。ペレイラ將軍がアムネマチンを望見したのは、このウグツ山脈の南西側、百哩の彼方かららしい。彼はチベットに三回旅行している。

峠を下つてC9（三八五〇米）前方にゴロク族の天幕が展開されている。

峡谷を遡つてその上流にC10。ゴロク族とはじめて交渉する。アムネ・マチン北部のゴロクは、アルチュン、ツァンゴル、カンサルカンレン、セルタート、ブツァンカンイン、リマン、トバ等の諸部族に分れているらしい。

ジャンチョウ峠（四三五〇米）を經て喀喇泊（四〇八〇米）の西方でC11（四〇六〇米）カラ泊をシナ人はクォラ湖（にがい海）という。

C12は托索泊の南岸（四〇四〇米）に定める。フィルヒナーは之をトサン泊、マクナリー（Rnad McNally）はトス泊といゝ、シナ名ではツォソ湖又はツォ・クオという。トッスン・ノールとは蒙古語でバターの湖という意味、チベット名は〝一千の丘の湖〟という意のトンリツォナクというらしい（ペレイラによる）

アムネ・マチンの西部を戰時中に横斷した人がいる。彼の名をトルストイ少佐（Major I. Tolstoy）という。戰略事務局（OSS）に勤務していた軍人である。

C12の南に連亘する山脈はゾー（ヤクと牛の合ノ子）山脈といゝアムネ・マチンの西方延長上にあり、この邊を通過したフィルヒナーはこゝをも地圖の上にアムネ・マチンと記している。

航空會社の支配人ムーン・チンは一九四八年にこの邊を飛んで、アムネ・マチンを五八〇〇米といつたが、レイノーズ（Milton Reynolds）はその飛行士と二緒に一九四八年に之を三〇、〇〇〇呎とアメリカの新聞に發表した。

C12の南に當り千山という四八〇〇以上の山がある。

さていよいよこのC12が、神祕の山、アムネ・マチン搜索のための最後の基點となつたのである。

その夜クラークは主だつた者をキャンプ・ファイアの周りに集めアムネ・マチンへ接近するのに何故わざわざ遠廻りして、西方へ廻つたかを説明した。

クラークは、チベットにいるシナの諜報機關、回教徒の情報源、土民の中へ放つた自分等の密偵、ダライ・ラマの手先であるラサへのキャラバンこれ等のものを注意深く操つり、それ等をしてクラーク隊の眞の目標はラサにあり、アムネ・マチンは單なカモフラージに過ぎないことを流布させておいたのである。これは勿論ゴロク族を徒らに刺激しないための手段でもあつた。

次に、最もよく走る駿馬を使えば、托索泊は、目標に近づくのに非常に有利な地點である。情報によればゴロク族の勢力範圍は、オリン泊、ツァリン泊を越えて百哩の地點から角形に北方に曲つて柴達木盆地にまで達している。そうすると托索泊はゴロク族の縄張りの丁度眞中に位置しているわけになる。從つて今までの探檢家達の失敗が、こゝにその原因の一つがあることがわかる。

最後に、クラーク隊に有利なのはゴロク族の乘馬が、冬期の狀態から脱していないという點である。というのは、冬期には草が枯れていて飼料が充分でないから、その馬達がまだ元氣を恢復していない。それに反してクラーク隊の馬は充分榮養をとつているから、競爭になつた場合に有利である、という意味である。

こうした説明で一同は安堵したらしく、遂に同行を承諾することになつた。

突擊踏査は十日間の豫定とし、そこへ行くメンバー十七名は左記のように決つた。

クラーク（米國、基督教、隊長）
ドルジェ（蒙古、測量）
ソロモン・馬（トンガン、回教作戰）
チュツ・ツェリン（土民、佛教安内）
ボンバ（チベット、佛教、偵察）
ダンク（〃〃〃）
アブヅル（サラール、回教、兵士）あと十人兵士（つづく）

マナスル先遣隊壯行會

小原、橋本、村山三先遣隊員の歡送會は十七日午後六時から體協會議室で開催、別宮會長から壯行の辭があり、小原隊員の答辭の後、日高副會長の發聲で隊員の健康を祝福して乾盃、歡を盡した後、マナスルの十六ミリを觀賞して解散した。

なお一行は九月二十四日羽田發エール・フランス機で壯途についた。

フランスの山岳圖書、寫眞、器具の展覽會

フランス山岳會員エドアール・フレンド氏が舶載したフランスの山岳圖書、寫眞の展示會は九月十三日から十七日までフランス山岳會、本會共催、毎日新聞後援の下に日本橋丸善で開催、またフランスの登山器具展は十三日より十八日まで日本橋高島屋で開催、何れも多數の參觀があつた。

遭難對策委員會の設置

八月定例役員会において標記の件につき種々討議の結果、本部の指導部（擔當理事辰沼）でこれを運營することに内定した。詳細は次号で報告する豫定です。

カワミヤのアルパインソール
耐久・不磨耗・滑止
あらゆる点で NO 1
合資会社 代表 平林三郎
カワミヤ靴店
東京都大田区大森 8～3740
TEL (76) 5882

山の名著が廉価で買える
山岳新書
各冊一〇〇円（〒一六）
猪谷六合雄 雪に生きる（上）
猪谷六合雄 雪に生きる（中）
猪谷六合雄 雪に生きる（下）
麻生武治 スキー雜記
藤木九三 山の花暦
長尾宏也 山の隣人
冠松次郎 四季のたかね
木暮理太郎 登山の今昔
石川欣一 山を思う
山村民俗会 炉辺山話
平野長英 尾瀬の四季
田部重治 山をたゝえる心
伊藤洋平 回想のヒマラヤ
小島烏水 槍が岳からの黎明
早川義郎 山行歌曲集
槇有恒 —山行—
山と溪谷社
東京銀座八・出雲ビル
振替東京六〇二四九

穂高岳の早期登山者（一）

山崎安治

序

わが國の山岳中で最もアルプス的山貌を呈するのは、北アルプスの穂高と劒をおいては、ほかにない。特にこれが氷雪をまとつた時の山容はまことに壓倒的な魅力を感じさせる。穂高に登り穂高にはぐくまれてこの國の澤山の登山者たちは見事な成長をとげていつたのである。そして今後とも多くの登山者たちがこの山を舞臺に激しい試練を重ねるに相違ない。しかし、安曇平原の奥深く、雲霧を吐呑して鋭く天にそそり立つ穂高、この飛驒山脈の最高峰がどのようにして人類との關係を持つに至つたか、その早期登山の歴史や山名の由來などは、この山の華やかな存在に比して餘りにも世に知られていないように思う。日本ではヨーロッパのアルプスや、ヒマラヤの登山史に關する研究にはまことに優れたものがあるが、肝心の北アルプス關係のものでは、殆どみるべきものがないようである。諏訪多榮藏氏の〝穂高岳〟という立派な研究も世に出ているがやはり登攀ルート圖集ということに焦點が置かれているため登山史的な面からみると、とくに早期のものには十分觸れられていない。日本山岳會が生れてからすでに半世紀の長い年月が流れているのである。少くとも穂高なり、劒なりの一應まとまつた正しい登山史を知りたいと望むのは私一人だけではあるまい。そうした意味から、ここに穂高岳の早期登山について、眼にした資料の中から拾い上げて一つの覺え書を作つてみた。十分の資料を得られないので、もとより滿足なものとはいい難いが、他日穂高の登山史でも編まれるような時の參考になれば幸いである。

一、古文献にあらわれた穂高

穂高岳をはじめて記錄の中にとどめたのは享保年中（一七一六年―一七三六年）松本藩の編集になる信州地方の地理風土の模樣を述べた信府統記（全三十七巻）だといわれている(1)。これによると上河内、あるいは神合地という字を使用して詳しく現在の上高地の自然と風趣の神祕性を傳え、穂高岳について

『穂高嶽は梓川出口より大野川までの中程西の方にある大山なり、此嶽は往古より穂高大明神の山とも傳えて此の名有り。嶮山にして登る事能はず、麓に大明神の御手洗とてあら池というあり。廣さ三四丁四方程の池にて、深さ測り難く岩なという魚多くあり。柮人筏に乘りて是を釣る。此外梓川より西の方に山岳多しと雖も、深山にして往來なければ山名を知らず』

と記されてある。そして穂高を奥社とする穂高神社に關しては

『穂高與、穂高大明神は彦火瓊々杵尊を祀る。往古當國神合地穂高嶽に舊跡ありて、其後此所に鎭座せし故、在號をも穂高と稱するものにや（中略）此嶽清淨にして其形幣帛の如く、麓に鏡山、宮川、御手洗河、水ある所を神合地と云う』

とその緣起をしるし、田村麿の義死鬼（有明山の賊）征伐から境内に塚のある物苦太郎の傳記まで記錄されているという(2)。その形幣帛の如くといい、嶮山にして登ること能わずといい、何れもよく一言で穂高岳の風貌をあらわしており、穂高をとりあげた最古の文献としてこの信府統記の一章はまことに珍重すべきものであろう。

ついでこの山についての古文献としては、神河内説の根據として小島烏水氏によつて廣く紹介された善光寺名所圖會があげられる。(3)これは嘉永二年（一八五〇年）美濃今尾藩の豊田利忠が書いたもので、この中に文政元年（一八一八年）夏、高島章貞という穂高村の醫師の上高地に遊んだ紀行文〝穂高岳記〟が載せられている。その前文には

『穂高嶽（奥岳と云う）は安曇郡西の方飛驒の國に坂合う、仰は靈岳雲を凌ぎて幣帛のごとく中空に秀で群山麓に兒立す、神號も爰に據か。嶽に三乃湖水あり、上池、中池俱に大さ凡徑百五十間、横二百間ほど、奇石岸を繞りて自然の林泉を成せり、魚多くあり、いはなという。常に筏を浮めて柮人等これを漁る（後略）』

とあり、大體信府統記と同し内容のことが書かれていて、その終りに

『近き頃穂高村の醫師高島氏友達に誘引て彼靈岳に登り、其地理を寫し、且一章の文を作れり』

として續いて〝穂高岳記〟が漢文でしるされている。その一部をあげてみる。

『文政丁丑之夏、詣於穂高嶽尋穂高神社之舊祉、夫穂高嶽者、我信中當正西、而極深接境千飛（中略）此岳乎、巍々秀天外雖盛夏積雪不消、白雲漠々常不見巔青天朗日、偶然峻峰現、極目望之、危削峙立似白幣、嚴々神跡可仰哉、岳之足有三靈湖、大小不等（中略）此神岳也、吁靈哉、景哉、斯述所觀、用以例記云』

前文によると一行が彼靈岳（穂高を指す）に登りとみえているが本文の穂高岳記をみてもわかるように、烏水氏のいわれる如く實際に穂高に登つたものではなく、上高地に遊び、梓川、明神池のほとりから穂高を仰いでその印象をしるしたものである。この時の同行者は上條某、降旗某、その他三名といわれ當時すでにこの方面にも踏跡のようなかぼそい樵道がつけられていたのであろう。

天明三年（一七八三年）南齋上人の笠ケ岳登山、文政十一年（一八二九年）佛行者播隆和尚の槍ケ岳開山など、當時宗教的登山はさかんに行われていたが、こうした事蹟とは別に、宗教的登山の色彩を全く離れて、上高地に杖を引き、白雲去來する穂高の岩峰を仰いだ高島章貞は、いわゆる〝山を見つめる人〟の姿であつた。その先縱者の一人として、穂高を語るについては彼の名を忘れ去ることは出來ないであろう。

二、穂高岳の山名について

穂高を一名奥岳ともいうことは前記の穂高岳記前文にしるされており(4)さらに『靈岳雲を凌ぎて幣帛のごとく中空に秀で群山麓に兒立す、神號もこれによるか』とあつて穂高とは秀で高き山であることが記されている。元來穂高とは穂高連峰の總括した呼稱で、これを各峰頭ごとに名稱を附されたのはこの連峰の初縱走を行つた鵜殿正雄氏であり、その後多くの曲折を經て現在のものに落着くことになつたのである。

穂は秀の假字であると科野名所集に出ており『俊秀獨歩の秀高岳、洵に此山にして初めて此名あり』と鵜殿氏は述べている(5)。また坂井氏は

『秀高き意である。穂高見命の御名に因んでいるのはその族が名づけたためか、また偶然に高峻の山形を見て名づけたのが一致したためか、この場合では恐らく前者であろう。穂高社には皇孫をも配祀しているがその降臨された日向の高千穂の名も高穂峯で同義である。ただ一は高くして秀峰多き意、一は獨秀峰の意の相違があるだけである。この兩山名の一致はやがて安曇氏に關する古史實の片鱗を示すものの如くである』

と指摘されている(6)こうした古史實に關する考證は私のよくなし得るところではないので一とまずおき、ここでは主として各峰頭の命名の由來について眺めてみた

い。いまいつたように穂高とは廣く穂高連峰の總稱であつたが、それはこの連峰に多くの峰頭が藏されていたことが全く知られていなかつたからであろう。これが明治中葉以降大正中葉までのある時期には單に穂高岳といえば、現在の前穂高を指していたようである。そしてこの名稱は大正二年陸地測量部から發行された假製版五萬分の一圖幅燒ケ岳にも採用されていた。明治三十九年林並木氏は現在の前穂高に登つているがこれに奥穂高、明神岳を前穂高として發表されている(7)。榎谷徹藏氏は明治四十年槍ケ岳から望んだ穂高連峰のスケッチにおいて現在の通り前穂高、奥穂高の名稱を發表しているのは卓見である(8)。

これまでただ漠然として穂高といわれていたそれぞれの峰頭に命名したのはこの初縱走を記錄した鵜殿氏によるのである。同氏はその報告(9)において現在の前穂高を南穂高(案内嘉門次によると又四郎岳)最高峰を奥穂高、現在の涸澤岳を北穂高(嘉門次によると空澤岳)現在の北穂高を主峰奥岳の東北に當るので東穂高、そのほか南岳、中ノ岳、大喰岳とほぼ現在通り名稱をつけ、さらに卷末に石版ずり穂高岳附近踏測圖(五萬分ノ一)を附して詳細に穂高岳核心部の地形を明らかにした。等高線をもつて畫かれたこの地圖は恐らく穂高に關する最古のものと思うが、西穂高も西穂高としてこの時命名されてその地圖に表示されている。同氏は續いて大正元年夏岳川より奥穂、西穂への登攀後、前回の發表を修正し次のような獨創的見解を示された(10)。これを要約すると、總稱を穂高山または穂高岳とする。南岳より現在の中尾峠に到る國境稜線を一括して西穂高山群、現在の前穂を中心とした北尾根、明神の山稜を一括して東穂高とする。西穂高を区分して北から北穂高、涸澤岳、奥穂高、白出澤の頭(現在のジャンダルム)南穂高(現在の西穂高)と呼び、東穂高を区分して北から屏風岩連峰(現在の北尾根)明神岳(現在の前穂高)宮川頭(現在の明神岳)池尻(現在の明神最南峰)と命名された。この呼稱は北穂高、涸澤岳、奥穂高以外いまでは用いられていないが、當時の山岳界においては穂高連峰の呼稱を繞つて熱心な論爭が行われたことが鵜殿氏の書かれたものから窺われてまことに興味深い。それだけにそのころ穂高群峰の呼稱については山案内、測量技師、登山者とここに足を向ける者が增えるにつれて種々樣々なものが生れたようである。例えば明治四十四年七月小島烏水氏の〝穂高嶽より槍ケ岳まで岩壁傳いの日誌〟をみると次のように記錄されている(11)

『二十一日嘉門治脚部負傷のため悴嘉代吉の案内にて穂高嶽を、北口より登り穂高嶽と岳川岳(西穂高)の切れ目より南行して御幣嶽(南穂高嶽または明神岳)の一角に遠し、引き返して、奥穂高岳に登り、横尾の涸澤に下り、石小舍に一泊』(カツコ内は原文のまゝ)

大體いまの奥明神澤から明神に登り、引返して前穂、奥穂へと縱走したものと推測されるのだが、その名稱の複雜なことは全く了解を困難にしている。大正二年夏陸地測量部から出された燒ケ岳圖幅は各峰頭の呼稱を一層混亂させることになつた。即ち現在の西穂高が前穂高、現在の前穂高は單に穂高最高峰である現在の奥穂高には三角點がないという理由からか記名がなく、現在の涸澤岳を奥穂高、南岳が北穂高としてあり、いまの北穂高には峰名が記されていない。しかし大正中期より次第に現在の呼稱が使用され始めたようで、慶大齋藤氏が大正六年八月の穂高、槍縱走(案内嘉門次、同行藤山愛一郎氏)の附記(12)において

『奥穂高には確かに二峰ある。その高い方を穂高の最高點としたい。穂高はこれを中心として前穂高、西穂高は變りないとして、それから眞直に北に伸びて奥穂高の次にあるのが唐澤岳でこれには確かに三角點がある。(中略)天狗岩附近を通過して北穂高へ出る。北穂高の頂上は穂高山中で平地の面積を一番多く藏している……』

と述べており陸地測量部の名稱によらず奥穂以北は鵜殿氏の命名されたほぼ現在通りのものが用いられていることがわかる。これらを統一して現在一般に通用しているものを明確にしたものは慶大大島亮吉氏が大正十三年三月穂高岳スキー初登頂の報告の中に記された穂高岳の峰名についての一文であると思う。

『穂高岳の各峰名については現在でもいろいと人によつて異つて使用せられているようであつて、ある記錄を發表するに就ても甚だ紛わしくて困ります。然しここで私達は決してそれに就てのトポノミイカルな研究を發表するのではありません。ただ私達の以下において發表する記錄のうちに使用した峰名についてのお斷りを書くに過ぎないのであります(中略)陸測五萬分の一の燒ケ岳圖幅に穂高岳(三〇九〇・二米突)とあるを前穂高岳とし、地圖の上の穂高岳の山稜と地圖の上の前穂高の山稜との交點を奥穂高とし、同じく地圖上にて横尾谷の本谷と唐澤を分岐する山稜の最高點を北穂高としました。なお記錄中に出ずる峯名にて地圖上の前穂高岳(二九〇八・六米突)を西穂高岳とし、同じく奥穂高岳(三一〇三・一米突)とあるを涸澤岳(または空澤、唐澤と宛字するようであります)とし同じく北穂高岳(三〇三二米突)とあるを南岳としました』(13)

また三田幸夫氏が穂高の岩場をはじめて紹介されたもの(14)に附した略圖、穂高連峰概念圖(一九二四年十月の日附あり、佐藤久一朗氏作圖)にも大島氏と同し名稱をもつてしるされている。

以上の通り幾多の變遷を經て主要な峰頭に現在の呼稱が生れたのだが、それぞれの岩場や谷などにこまかい特殊の名稱が附されるに至つたのはそれらが開拓され始めた昭和以降のことである。

(つづく)

注および文献

1 上高地について、坂井衡平(ケルン第二十一號)信府統記はその後「神河内地名考」小島烏水(山岳卅五年一號)神河内志」中島正文(山岳卅六年一號)にも引用されている。前出1

2 上高地は神河内が正しき説 小島烏水(アルピニストの手記・書物展望社)

3 前出3

4 穂高岳槍ケ岳縱走記、鵜殿正雄(山岳第五年第一號)

5 前出1

6 笠ケ岳、燒岳、穂高岳紀行 林並木(山岳第一年第三號)

7 槍ケ岳の巔榎谷紫峰(山岳第三年第三號)

8 前出5

9 穂高群峰の稱呼につきて鵜殿正雄(山岳第八年第二號雜錄)

10 山と谿谷の日記、小島烏水(山谷放浪記・青木書店)

11 穂高岳に就て—劒縱走との比較齋藤新一郎(登高行第二年)

12 穂高岳スキー登山、大島亮吉 青木勝(登高行第五年)

13 涸澤の岩小舍を中心としての穂高連峰、三田幸夫(登高行第五年)

14

圖書基金寄附(敬稱略)

▽參百圓 川島 勇

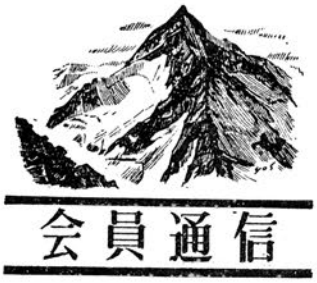
▽貳百圓 淺野孝一 藤田幸平

▽百五拾圓

累計 金貳萬壹千五百五拾圓

ヒマラヤ委員會事務所

日本山岳會ヒマラヤ準備委員會事務所は中央區八重州町三ノ五、槙町ビル二階二十六號室(電)(27—3010と決つた。期間は明年一月末日まで



会員通信

八木是峰氏の近況

平野推三

先頃在名日本山岳會員としての大先輩である八木是峯（道三）氏を知ることが出來、七十に近い年になられながら、いまだ山への情熱を持たれております。同氏の健在を當時よりの會員諸氏にお知らせすると共に同氏の懐舊談をお傳えします。本會の事務所が横濱の高野鷹藏氏方にあつた大正初期の會員として、慶應を出られてよりすぐ入會され、大正三年九月十二日發行の山岳に約十頁にわたり、「雪の日本アルプス越え」を執筆同文中の嘉門次の寫眞が今に至る山の先達であり名案内人の面影を殘しております。

同じころの赤石の登山も同氏山行中の大いなるものの一つで、同行三名と共に人夫十餘名を從えたこの山行は當時として大壯擧であつたこともお話をうかがいながら十分偲ばれました。當時の山岳會員がその裝具に拂つた苦心談も興味深くトビロのような長さ四尺餘の杖などもすでに試作され「ミマツ」で少々發賣されていたこと、いまの三倍の重量もある四本爪のカンジキや精巧な折たたみ式の提灯など當時の裝備についてのお話もいろいろ伺いました。

私の目を引いたのは當時同氏と交渉のあつた辻村伊助、高野鷹藏武田久吉、結城豊太郎氏らの私信や、山の記錄、寫眞、裝具のよく整理、保存されていることでした。大正八年渡英、昭和十六年歸國され、その後も山岳書を座右に置き山を一生の伴侶とされています。なお同氏住所は愛知縣東春日井郡高藏寺町です。

野地温泉から安達太良山へ

村上金吾

福島發朝一番のバスで野地温泉へきてみると、山は荒模樣で無理してはならぬと引きとめられ同温泉に泊ることにした。ところがまもなく物凄い暴風雨となり雨戸はとばされ屋根もいたんで雨がもり、温泉も濁水が流れこんでくるありさま、翌朝になつてもやみそうもなく何時のバスで歸ろうかと思つていたところどうやら風雨がやみ、青空さえ見えてきた。これは見つけものをしたと七時四十分同温泉を出發、舊土湯峠から鬼面山を經てサラサドウダンの美しい箕輪山の北面、五〇米ばかりの殘雪をわたるあたりにはショウジョウバカマ、イワカガミなどが咲き競うていて疲れも忘れる。

箕輪山頂九時半、鐵山十時半頃、そこで地元の青年と一しよになり、案内してもらつて安達太良（あだたら）本峯の鐵梯子をよじのぼり頂上に立つたのは十時五十分だつた。その頃、霧がはれて目の下に灰白色一色の沼の平火口原が現われ、遠く秋元、小野川、檜原の各湖が見えてきた。ついでに船明神山に往復して、東側のくろがね小屋におりて晝食、ここは武田博士が命名したという温泉付の山小屋である。そこから勢至平を經て岳温泉についた。そこで本宮行バスに乘る青年と別れ私は二本松行バスに乘つた。（六、一二五）

五月の長尾、ムイネ山

塩田輔雄

五月三日は雲一つない快晴、それに無風という天候に惠まれ、名殘りの春山スキー登山を長尾山、ムイネ山に試みた。五月初めの北海道は漸く春らしい感じの湧く時節になつたばかり、木の葉がようやく萠え出で、櫻の滿開にはまだ一週間はあろうという情景である。近くの山々にはもう雪は消え白さに替つて青草が眼につく。札幌から定山溪までの電車の窓からは今日登るであらうムイネ山が、紺碧の空に、まつ白な山容をあらわしている。豊平川は雪代で水嵩が増し濁流滔々と岸を嚙んで流れている。定山溪から薄別まで徒歩で約一時間、目につくのは山々の峯に累々と横たわる昨年九月廿六日の十五號台風による風倒木だ。如何にものすごい台風の暴力であつたかゞ想像される。薄別から夏道沿いに登る。雪は十分にあつたがゾンメルスキーは擔いで雪を踏み締め乍ら一歩一歩と進む。冬山造材の雪道が殘つている。靜まり返つた山の中に聞えるものは、蔽で啼くウグイスの聲と、はるか底の方に流れる谷川の音ばかり、とゞ松の梢にはソヨという風もなく、低地の水溜りには水芭蕉がみづみづしく伸びてその花は白く、またそのわきに黄色の花をつけたヤチブキが美しい對照をなしている。空の轟音に見上げるとジェット機が、青空に飛行雲を四條長く線を引いて行くのが見える。奥に進めば林は益々深く雪も又豊富である。オロチが原でスキーを着け、右に進んで白樺の林を進み長尾山の頂上に着いたのが午後の三時であつた。こゝからの展望は大きく雄大だ。去年の今日登つた余市岳も見える。羊蹄山、ニセコヌプリもはつきりと見えたし、札幌岳、空沼岳、惠庭岳、の連山も白い。尾根傳いにムイネの頂上に出で、頂上から一氣にスキーを滑らせムイネ小屋に着いたのは午後五時であつた。オロチが原で登り道に出で薄別に着いたのは夕闇迫る午後七時頃で、おぼろ月を眺めながら靜かな山峽の道を歩いて定山溪えと歸路を急いだ。札幌の近くのこの邊の山は五月でもスキーは充分に樂しめるし、日が長くなるから日歸り行程で愉快な一日を送ることが出來る。

夏の利尻と知床

古澤肇

北海道では駅に「夢の浮島利尻禮文へ！」というポスターが出ている。このさいはての島も今は道立公園で夏は觀光客が多い。そのためか稚内港から三時間（禮文島寄航の船便は六時間）の船旅は暗いじめじめした感じは全くない。島の鴛泊港に着いても言語風俗が明るく都會風で北海の孤島を想像して行くと意外の感にうたれる。

さて利尻富士（一七一八米）であるが鴛泊から頂上まで六時間、立派な登山道があるから大ていは夜の明けぬうちから登つて涼しい朝の間に下りているようだ。自分は朝寝坊のせいで明るくなつて出かけたからもう登山者は一人もなく元氣のよい下山の組に何人も出會つた。珍らしいのはやはり三百米位で這松帶になつて内地の高山の樣相が見られることだろうか。登りながら眺めると禮文島がなるほど夢の浮島のようである。空は青く内地の秋を思わせるような風の冷たさと岩の手觸りである。頂上には銅で葺いた小祠があり石の手水鉢までがある。利尻神社の本社は鬼脇にあるせいかこの祠も東南を向いて立つている。下山はその鬼脇に向つて下りたが、例のローソク岩の根もとからはじまるこの道は冬山おなじみのコースとて仲々險阻で、鎖場があつたりして命に別狀ない程度にスリルがあつて面白い。眼下には富士の裾野のような原野が開けて、北海道本道の天鹽の海岸が一衣帶水の眺めである。鬼脇まで下り四時間、再び鴛泊へはバスに乘つて歸る。

知床岬と羅臼岳

稚内から更に北へ宗谷岬へと向い轉じてオホーツク海に沿つて南下、網走へ出た。

網走港から知床岬の北見側の中心ウトロまで二十噸位の便船が陽

日に通つている（陸路は不便）この間四時間の船旅、暗い水の色をしたオホーツク海を渡つてウトロに着く。岩ばかりの海岸に鴉が群がつて宿屋が二軒、なるほど淋しいところである。こゝから更に二里の道を岩宇別に向うとこゝは北見側の最後の聚落で、開墾地であるが民家が泊めて呉れる。

北見側から羅臼岳（一六六〇米）に登るにはこの岩宇別を足溜りとするのがよく（一里奥の温泉は無人）一昨年、斜里營林署でつけた登山路が安全確實に頂上まで導いてくれる。所要時間はやはり六時間位。熊の足跡がいくつも見られる。自分が登つた八月十六日は朝、ガスが深いので出發をためらつたが、途中から晴れ上つて頂上に着いたときは完全に三六〇度の展望を樂しんだ。北方には奇怪な硫黄岳が聳え、眼下の根室水道の向うには國後島が、チヤチヤヌプリまでも鮮やかに見えている。下りは根室側、羅臼の村（頂上から指呼できる）へと下つたが、こちらの登山路は昨年羅臼村でつけたということで高山植物が美しく景色がよい。

羅臼の村は、村というより町といいたいほどの明るい開けた感じのところで、羅臼山岳會というのがあつて山の開發に力を盡している。會長さんは村の誠諦寺という寺の住職で西井誠誘さんという愉快なお坊さんである。自分は山を下りた翌日、この羅臼の港から岬の突端まで漁場通いの便船に乘つて、一日がかりで半島を海の上から見物することができた（例の人喰い船長のビギンの鼻なども）夏の間は毎日このような便船があるというから遊覽には便利である。（北見側には今のところこのような定期便はない）羅臼の村から根室標津驛まではバスで三時間である。

図書紹介

越後山岳（第五號）

この號は飯豊山の特集である。郷土の山として飯豊山の存在が大きいだけに、この山に打込んでいる會員の情熱といつたようなものが行間に感じられるのは當然であろう。

胎内川本流、赤谷口、大石口、三面川遡行などの登山記はその中でも貴重なものというべく、こうした山がまだ日本に殘つているということは嬉しく、また越後支部の會員諸兄の幸せを感じさせるのである。

この地區が國立公園に指定されたゝめに、その施設計畫の詳細が專門家によつて報告されているのも特集の目的からいつて適切なものであるが、從來のような國立公園にしないで、あくまでも東北の山らしい自然とフンイキを温存するように會員諸兄の忠言と行動を期待したい。

飯豊、朝日の中間には今後とも登山の世界においても開拓していい部分もずいぶん殘されている。無雪期と積雪期たるとを問わず、支部の人々の研究と實踐によつて、正しく郷土の山を、全國の登山者の前に、正しい姿で開いてほしいものである。支部會員以外に松方、藤島、沼井の三先輩が筆をとつているがそれぞれ興味深く讀ませる好文献である。

昭三〇年七月、越後支部刊一三八頁一二〇圓

アルプスの三つの壁

ヘックマイヤー著
長越茂雄譯

非情の書といわれるが、まさにその通りである。アルプスに殘された最後の三つの課題、即ちマッターホン、グランド・ジョラスアイガーの三つの北壁の凄じい攻撃の物語をアイガー北壁の初登攀をなしとげたアンドレ・ヘックマイヤーがつゞつたものである。マッターホンとグランジョラスの北壁登攀についてはあつさり書きしるし、主題となつているのはいうまでもなくアイガー北壁の攻撃について述べてあるのだが、同じテーマで白水社から出された星と嵐にみられる一種の甘いロマンチシズムは、ここには露ほどもうかがわれない。どちらも同し生と死の紙一重にある凄じい岩壁登高の物語であるが、この本の筆のはこびはいささかのかざり氣もなく、むしろ粗朴である。だがそれだけにその底を流れている激しい岩壁との闘争の意慾は讀む者をして身の毛をよだたせる程の力をもつて迫つてくる。

一九三八年七月その北壁が攻略されるまで十數名の生命を奪つたその登攀史もくわしくふれているが、この氷のまといついた千八百米の標高差をもつ垂直の岩壁の登攀については、その當時も色々と日本にも傳えられていた。しかしその眞相はうかがう由もなく、またかなりゆがめられて傳えられていたように思う。

が、この手記を讀むとこの登攀は決し無鐵砲な僥幸をたよりにしてなしとげられたものではなく、きびしい訓練と周到な研究、準備の上に立つて實をむすんだものであることを知るのであり、山登りの鐵則はきちんとふまれていたのである。何回かにわたる偵察により、ここは單なる岩壁ではなく、困難な構造を持つ氷の壁であることをつきとめ、十二本齒のアイゼン、長いアイスハーケンなど十二分の準備をととのえた上、しかも鮮やかなチームワークをもつて成功をかち得ているのである。そういうことを知り得るという點でも一讀に價いすると思う。（Y）

朋文堂發行、二八七頁、口繪寫眞三十三葉、定價三三〇圓

チベットの七年

ハーラー著
近藤等譯

この本はずい分ジャーナリズムにとりあげられ、毎日、朝日、東京、産經と各紙にそれぞれ書評が掲載された。だから今さらここで紹介するのも時季はずれ感じがないでもない。本を手にとつてまず驚ろいたのは著者のハーラーという男は例のヘックマイヤーなどと一諸にアイガーの北壁をやつたクライマーであるということで、彼が全くの異境の地に七年間も暮し無事故國オーストリアにもどり得たものその猛烈なファイティングスピリットと強じんな體力に惠まれたからであろう。

一九三九年ナンガ・パルバット遠征からの歸り大戰が勃發し仲間と共に英國の俘虜收容所にぶちこまれた彼は、何度か脱走を企て、ついにヒマラヤをこえてチベット高原を横斷、アウフシュナイダーと共にチベットの主都ラッサにたどりついた。ここで思わぬ厚遇をうけ、五年近く若いダライ・ラマの教師となつてすごした傳説の國チベットの、夢のような物語はことごとくわれわれにとつても珍らしいことばかりである。

神祕のヴェールにくるまれていたダライ・ラマの日常生活がこまかく述べられているところなど極めて面白く、著者はダライ・ラマについてこう書き殘している〝彼クンデュンはラッサの貴族や一般民衆にくらべてずつと血色のいい顔色だつた。兩眼は一般のヨーロッパ人よりわずかに細いくらいで魅力たつぷりで生き生きしていた。頬は紅潮し、唇にはいつも微笑をたたえていた。耳は僅に頭からつき出ているが、これが佛陀の再來であると認められたしるしの一つであるということを後で人から聞いた。頭髪は一般より長目だつたが、これはポタラ内の寒さから身を保護するためかのようだつた〟とにかく冒險旅行記としてまことに興味深い。（Y）

新潮社發行、二三二頁、定價四二〇圓

☆☆☆☆☆

石・楠・花

永原　輝雄

☆☆☆☆☆

「雲表」を返しに行つてその次に借りたのは、同じく小島烏水氏の「日本アルプス第一巻」であつた。私と中學同級の大下正男君の小石川駒井町の家には、その前々年になくなつた嚴父藤次郎氏の藏書が澤山あつて、その中には山岳圖書が相當見られた。

その嚴父は人も知る明治時代の水彩畫家として名をなし、また日本山岳會の創立當時からの會員で、小島烏水氏とは特に親交が厚かつた間柄で、烏水氏の著書は署名入りで贈られたものも多かつたようだ。正男君の處から借りて初めて讀んだこれらの山岳書によつて中學二年の私は、どつちかといえば少年期の冒險的興味が手傳つたのであろうか、次第に未知の山えの憧れに引入れられてゆく自らを見出した。それと共に「日本アルプス」の巻頭を飾つた石楠花に昆虫を配した烏水氏のエクスライブリス（藏書版）の圖案に魅せられたのか、未だ實物を知らなかつた石楠花に不思議な程の愛着を感じて、何時の日かこの花の咲き匂う高山に旅する自分を空想して、胸を踊らせた。

その翌年（大正三年）の秋、修學旅行で日光に行つた時のことである。二日目湯元に泊つた我々は温泉が珍しく一晩に數回浴して夜もろくろく寢ないで騒いていたが、翌朝は湯の湖から立上るる湯氣を後にして冬枯れの戰場ケ原に出て三本松邊で、こけもゝの赤い實を摘みながら三々五々、龍頭の瀧から中宮祠にと下つて來た。

この邊は紅葉が眞盛りで燃えるような葉の色が晩秋の陽に映え、汗ばんだ若人の頬を赤く染めている。湖畔の茶店で中食の握飯をほおばつている時、私は店先に植えてある石楠花の木を見付けた。その中の一本は一尺にも足りないが、枝が繁つて小指の先位の蕾が三つ程ついていた。これが私が前から憧れていた石楠花だと思うとむしように欲くなり、店のおやぢに瀬んで僅か十錢出して、無理に譲つて貰つた。風呂敷で根を包むと同時に、大切に蕾をいたわつた積りだつたが中宮祠から日光に下る途中のジグザクの急坂を、殆んど走りづめだつたので、日光の町についた時はあたら蕾は一つも殘つていなかつた。

家に歸つて鉢植にしたら幸い根ついたが、丹精が行屆かなかつたせいか、それから先は思い出したように一二度薄紅の花が咲いただけであとはただ春先の若葉の美しさを愛でる植木として庭の片隅に忘れ勝ちになつてしまつた。

しかし、わが家の石楠花がろくに花を見せない間に私は毎年連續山行を實現する機會を得て待望の野生の石楠花に堪能することが出來た。まず最初は吉田口からの富士登山で六合目邊で石楠花の群生の中に身を浸して心ゆくばかりこの花を愛でた。そればかりかこゝでは石楠花の枝が石室で、囲炉裡に燃され、また箸に作られて賣られているのを見て驚き且つ悲しく思つた。その次の夏には書物の中では既に何遍も登つて卒業した日本アルプスの白馬岳に登つて、大雪溪横葱平に百花燎亂を競う、高山植物のお花畑と、岩頭にうちふるえる可隣な淡紅の石楠花に歡喜した。また次の上高地から槍ケ岳登山では坊主小屋の石室に一泊して、偃松の間に咲きほこる黄花石楠花のけんらんさに引つけられてむさぼるようにスケッチした思出もある。薄紅、白色さては黄花等、五辯の花を數個づゝ束ねた花梗と、これを圍む濃緑色の艶つぽく滑かな葉の肌觸りは、乙女の生毛を思わせる裏面の綿毛とと共に、より多く女性的ではあるが、高根の花の王座を占めるものとしては、私は石楠花を第一に推奨したい。

ものゝ本によるとシャクナゲという植物は北半球の寒帶温帶を原産地とするが、その他のところでも廣範圍に分布されその種類は六百種もあるということだ。

英話で Rhododendron といつているが、これは元來ギリシャ語で Rhodon は赤い dendron は木という意味で、赤い花が咲くのが原種ではないかと思う。獨乙では Alpen Rose といゝ、佛蘭西では Rosege 中國では石南花と稱したのが、日本には石南木、或は石楠花と傳つたのではなかろうか。所がヒマラヤ山麓の大シャクナゲは R. Arboreum. Smith（喬木の意）といつて、セイロンからヒマラヤに亘る熱帶アジヤ地域に、分布されている種類で、灌木の多いシャクナゲの中、此種だけが、喬木で樹高十數米、幹の直径十糎以上にも及ぶものがある。花の一束に二十花も塊り咲いて、濃緋色のものさえあり、他の追從を許さぬ美しさといわれている。私は昔、確か大正十年頃と思うが、日本畫家であり、また登山家の石崎光瑤氏の印度旅行の講演會で着色幻燈に現われたヒマラヤ・シャクナゲの美しさに心を打たれた記憶がある。それから十數年經つてからではあるが、私がヒマラヤ見物にダージリンに行つた時あの有名なヒマラヤ・シャクナゲを見たいと念願していたがちようど冬季で山見物には惠まれたが花の見られる時季ではなく、ただ大きな蕾をつけた見上げるばかりの大木を眺めただけで花は割愛する外はなかつた。その宿望のシャクナゲの大觀を、日本にいながら見られる機會が來たことは喜ばしい。それは一九五三年のヒマラヤ・ブームによつて、日本のマナスル登山、英國のエヴェレスト登頂のスライドや映畫で天然色のヒマラヤ・シャクナゲが山麓住民の和かな生活の中に、溶け込んだ風物詩として扱われ、息づまる様な闘志に燃えるアイスフォールや、クレバス突破の情景を對蹠的に、より效果あらしめている。赤色の勝つた英國のカラーフイルムは、實物以上に鮮明に花を見せているとしても、兎に角ヒマラヤのシャクナゲは、世界の名花として時代の脚光を浴びて來たことは事實であろう。

山と溪谷社刊行山岳新書は本會々員には二割引されます。ルームで取扱つていますから御利用下さい。

會務報告

役員會

七月　理事會　十三日（水）

出席者、別宮會長、槙名幹會員理事、成瀬、小原、沼倉、渡邊交野、辰沼、千谷、今村、吉阪村山、金坂、折井、村木、大塚評議員、岩永、監事、石原

議　事

一、遭難對策委員設置の件
遭難處理に對する指導相談の受付窓口として、支部を含め、委員設置を決定する。

二、體協醫務部へ登山前の身體檢査依頼したく、具體的方法、交渉を辰沼理事に一任する。

報　告

一、フランス登山家の來朝に際し毎日新聞社にて後援の件、前号報告の參名來朝に際し、講演會、展覧會の開催は毎日新聞社事業部にて計畫實施することになつた。

二、學生部近況の件

三、ウェストン祭出席の件（前號辰沼報告參照）

四、ガネッシュ・ヒマールの報告書整理の件。資料を蒐集して、プリントに出來るまでのものを纒める様に整理を進めている。なお保存用としてのアルバムの製作を研究するよう村山理事に依頼す。

五、國體（明年度）開催時期變更の件。第十一回兵庫縣の國體は「氷の山」に豫定しているが、積雪期以外の登山は困難なるた

め三月十五日に變更を兵庫縣より體協に申入れがあつた。

六、第三次マナスル登山準備の件

ネパール政府より今秋及び來春の登山許可を正式に受けた。今秋に對する處置を關係者と協議檢討の結果今春のように準備不足を理由として登山隊を派遣しなかつた經過を辿ることは許されない狀況にある。從つて科學者を中心とした先遣隊を派遣したい。隊長の引受けは未だ保留となつているがもし引受けられない場合にも後任隊長に對し迷惑の掛からぬように萬全の準備を進めている。なおヒマラヤ委員會を設置したく案を作り役員總會にて決定されたい（槙）

八月　臨時役員總會　一日（月）

出席者、別宮會長、松方副會長槙名譽會員、理事、入澤、成瀬沼倉、小原、千谷、今村、村山金坂、評議員、岩永、辻、早川村井、監事、加藤、毎日新聞社古市

報　告

一、第三次マナルス登山隊長として、槙氏受諾する。

二、先遣隊を左記參氏決定し九月中に出發させる

リーダー、小原勝郎（本會常務理事）村山雅美（本會理事）橋本誠二（會員、北大理學部助教授）

八月　役員總會　十日（水）

出席者、日高副會長、槙名譽會員理事、入澤、成瀬、渡邊、沼倉交野、外山、辰沼、千谷、金坂折井、評議員、沼井、岩永、神谷、辻、東京支部、星野

議　事

一、ヒマラヤン・ソサエティ關係資料送附及び問合せの件、外務省情報文化局長より本會長宛に左記要旨の來狀に接す。本年度末ニューデリー及びボンベイにて、登山具展示會を開催につき展示資料を送附あり度し最近ヒマラヤ登山にて死亡した人達の記念碑設立の案あり、意見を知りたし

右を常務理事に附記する。

二「山岳」編集擔當、村山理事がマナスル先遣隊に參加のため後任決定の件。

右に關する人選を交野理事に一任する。

報　告

一、マナスル登山先遣隊派遣の件

八月一日臨時役員總會に既報の如く三名を派遣する。先遣隊の任務として（1）本隊が一日も早く（三月中旬までに）サマ部落に入れるよう調査する（2）雪崩の研究（3）登路の研究（地圖の作製）（4）五四年度に使用した部品のテスト（5）前二回の登山スケジュールの再檢討（6）陸送の見透し（經費節約のため裝備品等は船便、陸送とする）（7）サマ部落とはなお一層の諒解を深めるなどを依頼する（槙）

二、富山縣夏山技術指導者講習會出席の件、八月五日～六日に亘り、富山支部、縣教育委員會主催の講習會に沼倉理事が參加す

三、國體關係報告

七月理事會にて既報の明年度兵庫縣「氷の山」の冬期開催申入れの件は、體協にて正式否決となつた。秋に實施出來る山を選定しなければ、取止めもやむを得ない狀況にある。

四、東京都山岳連盟設立並に役員選出の件

支部は從來のまゝとして、東京在住の會員有志をもつて加盟し連盟會長を松方氏に依頼、常任理事を本會側六名、東京岳連側より六名ととして實質的の運營に當ることになつた（星野）

五、庶務事項

（1）故名譽會員加賀正太郎氏の新盆に當り、燈籠を贈呈す。

（2）體協福井氏先般渡航に際し餞別を贈呈す。

六、月例會計報告

ヒマラヤ登山隊寄附

（敬稱略）

▽壹千圓　額田　敏

▽五百圓　大森明悦　諸岡一次　吉田竹志

計金貳千五百圓

會報編集者交代

會報の編集もだいぶマンネリズムになつて来ましたので一八〇號を最後に編集者を交代させてもらいました。

今後は編集委員をつくり、山崎安治君を中心に新鮮にして充實した會報を會員諸兄姉の机上にお送りすることが出来ると思います。御支援をお願いします（渡邊）

昭和三十年九月廿五日發行
東京都千代田區神田駿河臺四ノ六
發行所　社團法人　日本山岳會
編集者　山崎安治
電話神田(25)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港區赤坂溜池五番地
印刷所　株式会社　技報堂

登山用具の專門店
好日山莊
プライスリスト進呈
東京店　海野治良
中央區銀座西二ノ五　電話京橋(56)3600
大阪店　西岡一雄
北區堂ビル前　協和銀行三階
神戸店　島田眞之助
生田區三宮町一ノ三二ノ一